

献辞

吉川元特任教授への献辞

大芝 亮
広島平和研究所長・特任教授

吉川元先生は、1976年3月に上智大学外国語学部を卒業され、1978年3月に一橋大学大学院法学研究科修士課程を修了されました。そして1978年9月から1980年8月までのトロント大学大学院への留学を経て、1995年に一橋大学より博士号の学位を授与されました。

1982年4月、広島修道大学法学部講師に就任され、同大学法学部助教授・教授を経て、1998年4月、神戸大学法学部教授就任、2007年4月には上智大学外国語学部教授に就任されました。

先生は、博士学位論文（『国際安全保障と人権—CSCE 人的側面に関する考察—』）において、ヨーロッパ安全保障協力会議（CSCE）を研究されて以来、国際関係論に基づきCSCE（あるいはOSCE）や予防外交に関する分析に積極的に取り組まれ、これらのテーマに関する研究をリードされてこられました。また、先生は、馬場伸也先生（大阪大学）のトランスナショナリズムに深く共鳴され、この視点に基づく研究も数多く公表されてきました。このような研究活動に取り組むなかで、先生は多数の大学院生の指導に当たられ、数多くの優秀な人材を世に送り出されています。

先生は、2013年4月に広島市立大学に赴任され、2019年3月まで広島平和研究所教授および同研究所長として、本研究所の研究・国際交流・教育等の活性化のために尽くされました。まず、研究活動については、本研究所による従来の研究活動を発展させるとともに、新たに紀要『広島平和研究』および『広島平和研究所ブックレット』の発行を開始されました。また、被爆70周年記念事業の一環として『平和と安全保障を考える事典』（法律文化社、2016年）を企画され、編集責任者を担当されました。このように、吉川先生は本研究所の学術的研究活動を活性化させるために強力なリーダーシップを発揮されました。

また、2016年に韓国・世宗研究所と本研究所の学術交流協定を締結し、2019年には中国・遼寧大学日本研究所と本研究所の学術交流協定締結にご尽力されるとともに、これらの研究所とのワークショップを開催されるなど、本研究所の学術研究の国際化にも積極的に取り組まれました。

さらに、先生は、大学院平和学研究科設置を構想し、その設置準備を精力的に進められました。そして2019年4月、大学院平和学研究科が充足することになり

ました。その他、英語による市民講座を開設されたことも述べておきたいと思います。

先生は、このように、広島平和研究所長として、本研究所の研究基盤を整備され、また大学院教育を本格化させるための体制作りに変なご尽力をされ、地域貢献にも寄与されました。

吉川先生は、広島平和研究所長としてだけでなく、研究者として、また教育者としても大なる貢献をされております。研究については、CSCE (OSCE) の研究や予防外交の研究を継続・発展され、日本国際政治学会などにおいても部会・分科会を組織し、この領域の発展に寄与されています。加えて、本学赴任後は、単著として『国際平和とは何か—一人間の安全を脅かす平和秩序の逆説』(中央公論新社、2015年)、共編著として『グローバル・ガバナンス論』(法律文化社、2014年) および『なぜ核はなくなるのかⅡ—「核なき世界」への視座と展望』(法律文化社、2016年) など、平和学に関連する研究書を出版されています。さらに、本研究所における「アジアの平和」に関するプロジェクト研究を主導され、その成果として『アジアの平和と核—国際関係の中の核開発とガバナンス』(共同通信社、2019年) や『アジアの平和とガバナンス』(有信堂高文社、2022年) を出版され、本研究所の研究成果の発信にご尽力されています。

教育に関しては、2019年に大学院平和学研究科が設置されると、先生は、本研究所の特任教授として、「平和学」(日本語による授業と英語による授業)、「安全保障論」(日英双方による授業)、「予防外交論」の講義を担当するとともに、大学院生に対する研究指導に情熱を注がれてこられました。そのおかげで、設置後まだ日も浅い大学院平和学研究科においても優秀な人材の育成に実績をあげることができるようになってきています。

この他、先生は、本学赴任以前から本学在職中においても、前述の日本国際政治学会はもとより、国際法学会や日本平和学会においても、理事や評議員として、学会活動に多大な貢献をされてきたことを付記しておきたいと思います。

吉川先生は、2024年3月末日をもって広島平和研究所特任教授を退職され、本学名誉教授の称号を授与されることになりました。先生の、広島市立大学、特に広島平和研究所におけるご貢献は、以上述べられた事柄をもってしては到底表すことができないほど大きなものであると言わなければなりません。この献辞におきまして先生への心からのお礼の気持ちを述べさせていただきますとともに、末筆ながら先生の末永いご健康とご活躍をお祈り申し上げます。